

ビューヒナーにおける 自然科学研究と文学

——ハーモニーとカオスとの葛藤——

浜 本 隆 志

I

周知のようにルネッサンス以降、ゲーテ、ノヴァーリス、シャミッソー、ビューヒナー、シュニッツラー、デアブリーン、ムシル、ベンなど、多数の作家がドイツ文学史上、自然科学の分野でも活躍してきた。彼らの文学作品に、自然科学やその思考方法が無視できぬ大きな影響をおよぼしたことは、容易に推測できよう。が、具体的に作家の内面において、文学と自然科学はいかなる関係にあったのか。両者は根本的に異なると断言できるのか否か。これは作家の世界観の根源にかかわる極めて重要な問題である。拙論ではビューヒナーを例にとり、この問題を考察したい。とりわけ今日では、自然科学は人類存亡をも規定しているだけに¹、19世紀前半の近代科学勃興期に、自然科学者として作家として活躍したビューヒナーの軌跡をたどるのも意義あることと思う。

今日、ビューヒナーの文学的名声は自然科学的それをはるかに上まわっている。が、彼は元来、文学者である前に自然科学者であった。彼の内奥に瑞々しい創作意欲があったことは誰も認めるところである。しかし彼は決して文学によって身を立てようとはしなかった。彼を自然科学研究へと没頭させたのは何か。異国の地で生活するためか、名声欲か。それとも

真理への探究のためであろうか。いずれにせよ、弱冠23歳でチューリヒ大学講師となり、比較解剖学を講じた彼の自然科学研究は、当時の一流の水準にあったといえよう。ところが彼の人生において、これほど重要な位置を占めていた自然科学研究が、従来、ビューヒナー研究のさいにあまり問題視されなかったのはなぜか。アプチャーレのように「ビューヒナーは決して自然科学の精神に影響されていない」²と断言できるのかどうか。たしかに文学のアウトノミーは重視しなければならぬ視点ではある。だが、自然科学者ビューヒナーという別の角度から彼の作品を照射するとき、新たな彼の文学像が浮かびあがるのではないだろうか。イエンスが「この24歳の詩人であり社会学者でかつ解剖学者は、どれほどはるかに時代を先どりしていたのだろうか。彼の時代を、あるいはわれわれの時代をも越えていたのではないか」³と驚嘆している彼の斬新な文学の秘密も、むしろ自然科学研究にその一因があったといえないだろうか。

II

ビューヒナーはヘッセン大公国の管区外科医の長男として生まれた。およそ16世紀以来、ビューヒナー家は代々医者の家系で⁴、父親の職業が彼の将来の進路を決するさいに、重要な役割をはたしたのはいうまでもない。友人の F. ツィンマーマンが証言しているように⁵、ビューヒナーはギムナジウム時代から、将来、自然科学の分野に進むことを何の疑念もなく決めていた。1831年11月9日、フランス領シュトラースブルク大学へ入学した彼は、「解剖学、動物学、生理学」⁶などを学び始める。当時、この大学では解剖学の G. L. デュヴェルノワ教授、生理学の E. A. ラウト教授が著名であり、前者は「自然哲学的」、後者は「経験的・実証的」な学者であった。この二つの研究方法が対立し、論争をひきおこしていたが、ビューヒナーは時代の先端をゆく彼らの講義によって、将来への視野を広め

ることができた。同時に、フランス7月革命の余波のたゞよう大都會の自由な雰囲気や革新的な政治風土、友人とのサークル活動、ヴォーグゼン縦走、下宿先の娘ミンナとの婚約などを通じて、彼は急速に人間的成長をとげるのである。この青春を謳歌したシュトラースブルク滞在は、ゲーテの場合と同様、彼にとっても多感な青年の胸に焼きつく、人生の最も幸福なひとときであった。だが、2年間以上の外国留学を禁じた故郷ヘッセンの法律にしたがい、彼は1833年10月31日にギーゼン大学へ転籍せざるをえなかった。

帰郷した当時、彼は脳膜炎をわずらい、偏狭な田舎政治や学生運動に失望し、さらに恋人から離れた寂寥感も重なって、彼は悲痛な心境に陥る。が、精神的な危機を脱した彼は、態勢をたてなおし、学問の面ではシュトラースブルク時代の専攻を継続する。とりわけこの時代に彼が興味を示したのは、将来の研究テーマともなる比較解剖学である。ここではJ. B. ヴィルブラント教授がその科目を講じていた。教授は「色彩論についてすでにゲーテからも評価され⁷」、前途を嘱望されていたが、当時「奇行が目だち」、学生間の評判は芳しいものではなかった。ギーゼン時代にビューヒナーは単なる机上の学問だけではなく、広く現実を直視し、貧困に苦しむ農民を救済すべく政治活動に参加する。この経緯についてはすでに考察した⁸ので省略するが、結局彼は大逆罪という汚名をきせられ、当局から指名手配されるのである。せまりくる危険から逃れるために、彼は亡命を決意する。前述のデュヴェルノワならびにラウト教授らの援助もあり、ビューヒナーは再度シュトラースブルクへ脱出するが、ここで自然科学研究を継続することができたのは、彼にとって幸運であった。

当面ドイツへ帰れぬ彼は、将来への展望を最も切実に考えねばならなかった。異国で生活するために彼に残された道は、文筆家か学者しかなかった。彼は文筆活動でも十分生活できる旨を、かなり自信を持って1835年4月20日付の家族宛の手紙の中で書いている。

「ばくは自分の将来を非常に冷静に考えています。いずれにせよ文筆活

動によって生活することはできるでしょう。……新しく出版されたフランスの文学作品についての批評を、文芸雑誌へ投稿するようにも要請されました。原稿料も十分支払ってくれます。それに十分時間をかけようとするなら、もっと金を稼げるでしょう。しかしぼくは自分の研究計画を断念しないように心に決めています。」(S.267)

ビューヒナーは文筆活動を最終的な職業にする気はなかった。折にふれて彼は、学問研究を文筆活動より優先させたい気持ちを述べているが、彼のいう「研究計画」とは具体的に何であったのか。1836年9月2日の手紙にこう書かれている。

「ぼくは目下のところ自然科学と哲学の研究に没頭しています。近々スイスへ行って、社会の余計者としての身分で、同じく非常に余計なもの、つまりデカルトとスピノザ以後のドイツの諸哲学について、学生らに講義をする予定です。——それと同時に紙上で何人かの人間を殺したり、結婚させたりして、神様に人の良い本屋とできるだけ無趣味な多くの読者をお恵み下さいとお願いしています。」(S.286)

彼の「研究計画」とは自然科学と哲学の研究であった。現代では自然科学と哲学はずいぶんかけ離れた学問対象であるようだが、当時、両分野は隣接していた。これは彼の自然科学論文を読めば、哲学と無関係でないことが容易に理解できよう。いずれにせよ、第二次シュトラースブルク滞在以降、ビューヒナーは自然科学、哲学、文学という三つの分野に強い関心を示している（この三者の関係は世界観とのかかわりで重要なので後述することにしよう）。

さて彼の自然科学研究の成果を世に問う時期がきた。『ニゴイの神経系に関する覚書』⁹は、シュトラースブルク博物学協会で公表され、好評を博した。この論文を彼はチューリヒ大学へ提出し、学位を得て研究者の道を歩むことになるのであるが、以下、彼の自然科学論文や大学での講義録の概要を考察しておこう。

III

『ニゴイの神経系に関する覚書』では、当時脳神経やその機能についてまだ明確な結論のでていなかった、脊椎動物の末尾に位置する魚類のニゴイの神経系が、研究対象にされている。ビューヒナーは綿密な比較解剖学的な視点から、「脊髓神経、頭蓋椎骨ならびに脳のふくらみと脳神経との関係」¹⁰を考察する。具体的にこの論文で彼は、脊髓につながる神経を、嗅神経、視神経、動眼神経、滑車神経、外転神経、三叉神経、聴神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経の10の神経に分け、それぞれの機能を分析する。その詳細な記述は省略するが、結論の1部を引用しよう。

「わたしの仕事を総括してみると、わたしが証明したと思うのは、基本脳神経は6対あって、6個の頭部椎骨がこれに対応すること、脳質が発達するのはこれらの神経が生ずるためであり、その結果頭部というのは脊髓と脊椎が変形 (métamorphose) したものにすぎないこと、ならびに脊柱の前にある植物的生命の臓器は、高度なものになるとはいえ頭蓋の前にもまた存在すべきことなどである。」¹¹

こうして彼はこの分野の研究を一步前進させるのであるが、彼の研究態度は緻密で客観的かつ実証的である。具体例をあげ、従来の学説の不備や欠点を批判しつつ、彼は次のような言葉で論文を結んでいる。

「自然は偉大かつ豊富である。それは自然が新たな機能のために新たな器官を勝手に創造するためではなく、最も単純なプランに従って最も高度かつ純粋な形態をつくり出すが故である。」¹²

ここにはビューヒナーの自然観、すなわち自然を最も単純な形態から高度な形態へ発展するものと把握する、彼の見解の原型が述べられている。また同時に器官の機能を目的あるものとして考察する立場とは違った、反目的論への萌芽もここに見い出される。

さて彼の自然科学研究における反目的論は、次のチューリヒ大学の講義録である『頭蓋神経について』の中で、より明確に展開されている。この講義の中でビューヒナーは、イギリスやフランスで支配的な自然科学における目的論的思考方法と、ドイツで支配的な反目的論的思考方法を比較する。まず目的論とは、器官を目的をもつものとしての個体と認め、合目的性のあるものを唯一の法則とするのである。すなわちこの見解にしたがえば、「眼がその機能を果たす場合、角膜は湿った状態ではなければならない。それで涙腺が必要になるのである。」(S. 235) この立場に対して、ビューヒナーは反目的論的視点に立ち、「涙腺は眼を湿らすために存在するのではなく、涙腺が存在するから眼が湿める」(S. 235) と考え、目的論を反駁するのである。彼はさらにそれを普遍化してこういう。

「自然は目的に従って行動しない。自然は一方が他方を制約するという目的の無限のつながりのなかでぎすぎすすることはない。むしろ、自然はその森羅万象において、直接自分自らに満足している。存在する一切はそれ自身のために存在しているのである。この存在の法則を見出すことが、目的論に対立している見解の目標である。」(S. 236)

彼の見解では、単に個々の器官の機能のみならず、普遍的に自然現象全体が「外在的目的」によって制約を受けるのではなく、自然の中で実在するものは、それ自体の中に存在価値があるというのである。ビューヒナーは当時ドイツで主流を占めていたオーケンやゲーテの自然観から影響を受け、彼の見解を確立したものと考えられる。とりわけオーケンはビューヒナーが就職しようとしたチューリヒ大学の教授であり、彼自身もまた「学問・哲学の領域が政治と結びついた」¹³ 人生を送っていたので、ビューヒナーに示唆することも多かったと思われる。ではビューヒナーのいう自然の「存在の法則」とはいったい何か。彼は自然の「物質的存在」は「美の法則があらわれた」ものであって、それは「最も単純な構想と輪郭によって、最高の純粋な形態を作り出している」(S. 236) という。こうしてビューヒナ

一は最も単純な有機体の中に、自然の根本法則を見極め、それを複雑な形態と比較して普遍的な自然の法則を確認しようとするのである。結局、彼の到達した結論は、自然の「形態や物質の一切もこの根本法則と結びつき、……その合目的な連続作用や相互作用は、同一法則の現象における必然的な調和以外の何ものでもない」(S.236)ということである。自然を調和した世界と把握する自然観は、彼の自然科学研究の根本哲学ともいえるものであって、極めて重要な意味を持っていると考えられる。以上の自然科学論文では、主としてビューヒナーの自然科学における思考方法や世界観を中心に考察してきた。彼の方法論はいく分哲学的な要素を持っているとはいえ、客観的・実証的である。この哲学と自然科学の混在は19世紀前半の自然科学勃興期の過渡的現象でもあろう。が、いずれにしてもビューヒナーの反目的論や自然と調和し統一的に世界を見る立場は、彼の自然科学研究の特徴であった。では以下にこれらが彼の文学といかなる関係にあるのかを考察してみよう。

IV

まず最初にビューヒナーの反目的論的立場と、創作(現実認識)における彼の世界観との関係を検討したい。そもそも彼が批判した目的論は、自然の法則を合目的性のうちに求めることによって、「目的のその目的を尋ね」(S.236)、それを限りなく遡及し続けると、究極的にはある観念、あるいは神を想定せざるを得ない。したがって目的論は観念哲学をその根底に置くものである。だからこれは観念の中に絶対的な人間のあるべき姿を目指す、理想主義とも軌を一にするものであろう。それに反してビューヒナーの反目的論は、前述のように目的を否定し、存在を重視するので、結局、観念哲学や理想主義と対立するものである。したがって彼の反目的論とは、反観念哲学や反理想主義と理解してよいであろう。

ビューヒナーは1835年7月の家族宛の手紙で、創作における理想主義について次のように述べている。

「いわゆる理想主義の詩人について……彼らは血と肉を備えた人間を作り出さず、その苦しみや喜びに僕は共感できず、その行為や行動は嫌悪も驚嘆の気持ちをひき起こさないのです。……一言でいえば、僕はゲーテやシェイクスピアを大いに尊敬しますが、シラーを評価しません。」

(S.273 f.)

彼の理想主義批判は作品『レンツ』の中でも明確に認められる。「その人々は犬小屋すら描くことができない。そこで人々は理想主義的な形姿を求めた。……この理想主義は人間の自然らしさへの最も恥ずべき侮辱である。」(S.76) 「その人々」とはカウフマン一派のことであるが、その背後にシラー、カント、ヘーゲルが念頭におかれ、ここでもビューヒナーは理想主義的なドイツ観念論を批判しているのである。

さて、人間のあるべき理想を想定する立場と対決する彼の姿勢は、道徳批判につながってゆく、というのも観念的な道徳が自然な人間性を抑圧するからである。彼はいう。「作家は道徳の先生ではなく、人物達を創造し、過去の時代を生き生きと再現するものだ」(S.272) と。これは具体的に『ダントンの死』の中でも、清廉潔白の士であるロベスピエールが道徳の重要性を説くのに対して、ダントンが次のように反論する箇所からも、明瞭にうかがえる。

「君の道徳ったらロベスピエール！ 君は賄賂をもらったこともない。借金をしたこともない。女と寝たこともない。常に身なりのよい上着を着て、酔っぱらったりしない。ロベスピエールよ、君はしゃくにさわるほど誠実だ。……君の心の中で時々全く小声でひそかに自分自身に『嘘つきめ、嘘つきめ！』と語りかけることは、いったいないのかね！」

(S.24)

ダントンはロベスピエールの内奥にひそむ生身の人間の欲望を洞察し、彼

の偽善者ぶりを批判するのである。ビューヒナーにとって重要なことは、観念的な道徳ではなく、生身の人間の現実の姿であった。この道徳批判からも、彼の創作の基本的姿勢がうかがえるのである。ビューヒナーは1835年7月の家族宛の手紙でも、こう述べている。

「劇作家の最高の課題は、現実動いている歴史に可能なかぎり接近することです。彼の本は歴史それ自体より道徳的でも不道徳的でもいけないのです。……だってダントンや革命のならず者らのような連中を道徳的な主人公にすることができないのですから。」(S.272)

前述の自然科学の世界観にもとづくビューヒナーの反目的論は、反理想主義(反観念論)、反道徳とつながり、彼の創作態度とも密接にかかわってくる。彼は作品の素材を現実の事件や史実に求め、それをリアルに客観的に表現しようと努めている。そもそも彼が戯曲形式を好んだのも、これが主観を排し対象を客観化するのに好都合であったからである。彼はレンツに仮託して「まあひとつ試みるんだな。そして、最もつまらぬ者の生命の中へ沈潜して、その生命を、ピクピク動く様や暗示、細かいほとんど認めることができない表情から再現したまえ」(S.76)と述べる。対象を凝視し、どのような構造、現象をも細部にわたり見おとすまいとする鋭い視線は、解剖学者ビューヒナーのそれとほぼ一致するのではないだろうか。したがって彼の素朴なりアリズムも、やはり自然科学の研究の際の認識方法と、根本的には同一とみなしてよいであろう。

ではビューヒナーの自然科学的認識方法やその影響が、作品の中で具体的にどのように表現されているであろうか。ダントンは「お前は愛らしい墓、お前の唇は甲の鐘、お前の声は僕を葬う鐘の音、お前の胸は僕の土まんじゅう、お前の心臓は僕の棺桶だ」(S.8)という。ベンを想起させるこの箇所では、解剖学的視点が文学的表現と異様に融け合い、現代文学的なレトリックを形成している。さらに『レンツ』では直接ビューヒナーの自然観が次のように述べられている。

「あらゆるもののなかに名状しがたい一つの調和、一つの響き、一つの至福がある。そしてそれはより多くの器官をもった高度の形態では、自由にいどみかかり、響きかつ悟る。しかしそのかわりまたそれだけ強くほかから影響を受ける。下等な形態ではすべてが押えつけられ、制限を受けているが、それにひきかえ、内部における平和も大きいのである。」

(S. 73 f.)

これはレンツが神にすべてをゆだね、至福に満ちた心境の時の自然観であるが、この箇所はビューヒナーの自然科学におけるそれと一致するといえよう。(しかし特筆すべきことに、自然を調和のとれたものと把握するこの見解の後に、あのレンツの精神錯乱に懊悩する世界が対置され、きわだったコントラストを形成するのである。)

さて『ヴォイツェク』では自然科学者である医者が登場し、専門用語が多用される。「膀胱括約筋」、「尿素 0, 10, 塩化アンモニウム、過酸化物」、「局所的な精神錯乱」、「二期症状：通常の理性状態をとこなう固定観念」(S. 167 ff.) これらは自然主義や表現主義の時代になって、ようやく文学の世界でも市民権を得るのだが、それよりはるか以前に、ビューヒナーは自然科学的な表現を通じて伝統的文学像を破壊し、斬新な文学世界を確立したのである。いずれにしても自然科学研究が彼の文学に与えた影響力は、作品を概観しただけでも容易に理解できよう。

ではビューヒナーが自然科学でみた世界と、彼の文学の世界が一致すると結論づけてよいだろうか。確かに彼は自然科学研究では反目的論の立場から、調和ある自然の法則を認識した。さらに彼は創作においても自然科学的方法論とは矛盾しないリアリズムの手法を用いた。この意味において両者の相関関係は認められよう。しかし彼の創作態度とその結果生み出された文学作品とは、異なる次元のものである。つまりビューヒナー文学の世界全体は、調和とはおよそ異質の不協和音が激しく渦巻いており、自然科学の世界とのコントラストは特筆に値するといっても過言ではない。た

たとえばダントンは次のようにいう。

「最高の安らぎは神であるにせよ、虚無が神ではないだろうか。……一切は喧噪に満ちあふれている。虚無は自殺し、創造はその傷あとなのだ。われわれは虚無の血のしずくであり、世界は墓場である。そこで虚無が腐敗する。」(S. 55)

この箇所では象徴されているように、革命の嵐の中で大立物も木の葉のように舞い落ちる。『ダントンの死』では、調和とは程遠い混沌そのものの世界が描かれている。

同様に『レンツ』でもそれが典型的にあらわれる。精神錯乱に陥ったレンツは神、自然、善意の人々のあらゆるものに背を向け、虚無の深淵の中で永遠の苦悩を味わわねばならない。

「風がタイタン族の歌のように響きわたった。彼は巨大なこぶしを握って天へのぼし、神をつかみ出して、雲間にひっぱりまわせるように思えた。世界を歯でかみくだき、それを創造主の顔に吐きだすことができるような気がした。」(S. 82)

「彼は永遠の罰を下された者であり、悪魔であった。彼には拷問にかけられた観念しかなかった。彼は猛烈な速さで自分の人生をかけめぐり、それから『矛盾だ、矛盾だ』といった。誰かに何かいわれると『矛盾ではない、矛盾ではない』といった。それは永遠に続く救いのない精神錯乱、その深淵であった。」(S. 87)

さらに『ヴォイツェク』でも、主人公は大尉や医者から非人間的に虐待され、唯一の人生の拠り所であったマリーにも裏切られて、あらゆるものから疎外されるのである。異常な幻覚や幻聴におびえる彼は「自然が二重になるのを見たことがありますか、太陽が真南にあって、世界がめらめら燃えあがると、恐ろしい声が語りかけてくるんです」(S. 168) 彼には本来人間に安らぎと潤いを与えるはずの自然さえ分裂し、人間に敵対するような不気味なものに思えるのである。

以上のようにビューヒナー文学を一瞥しただけでも、そこには不安、孤独、混沌、虚無、狂気、宿命、殺人、死、腐敗……などのあらゆるネガティブな要素が、われわれの内奥に迫ってくる。これは彼が自然科学研究で見た調和のとれた世界と何と異質な世界であろうか。いや文学だけではない。彼が見た現実社会もそうではなかったか。ビューヒナーは1836年1月1日の手紙の中でこう書いている。

「ぼくはクリスマスの市から帰ってきました。どこにもボロを着てぶるぶる震えている子供たちの群がいて、彼らは大きく目を見ひらいて悲しい顔つきをし、水や粉、べとべとしたものや金色の紙でできた豪華なケーキの前に立ちつくしていました。多くの人間にとっては、最も取るにたりぬ楽しみや喜びも手のとどかぬ高値なものなんだと考えると、悲痛な気持ちになりました。」(S.279)

自然界の調和のとれた世界に比べ、人間社会は矛盾や不合理に満ちあふれている。だからビューヒナーは「腐敗した現代社会をくたばらせねばなりません。どうしてこんなものがこの世を濶歩しているんでしょう」(S.282)といわざるをえなかった。彼の社会変革の思想は、当然以上の現実認識から生まれたものであるが、彼は厚い封建体制の壁にはばまれ、失意と苦渋を体験するのである。こうしてビューヒナーは文学や社会と自然科学の世界との間の大きな断層に直面したのであった。シュトラースブルク亡命後、彼が自然科学研究や創作にたずさわる一方、哲学研究を行なったというのは前述のとおりであるが、私はその哲学研究の意味を彼の世界観の確立、とりわけ自然科学と文学および現実認識との間に生じた深い断層を埋めるためであったと位置づけたいのである。したがってビューヒナーがスピノザやデカルトの哲学に没頭したのは、単にスイスの大学で講義をするためだけではなく、そのことは彼の哲学研究のなかでも大部の量を占めるスピノザ研究ノートを見れば、十分理解できよう。ここには彼にとって切実な現実認識や神への懐疑の問題が考察されているが、以下その

要点のみを簡単に確認しておこう。

ビューヒナーはスピノザの『エチカ』の定理11「神またはそのそれぞれが永遠でかつ無限の本質を表わしている無限の属性からできた実体は、必然的に存在する」¹⁴ ことに対して、次のような注をつけている。

「この証明はおよそ神が存在するものとして以外考えられないのではないかという結果になる。……もし神の定義を認めるならば、神の存在もまた認めざるを得ない。だがこの定義を作るために、何がわれわれに権限を与えるのか。知性か？ それは不完全なものを知っている。感情か？ それは苦痛を知っている。」¹⁵（傍点は筆者）

このようにすべてを統合する絶対的な神の認識においても、彼の研ぎ澄まされた知性はその「不完全さ」を、感性は「苦痛」を知っているがゆえに、この世には絶対的な神は存在しがたいという結論になる。つまり神がないからこそ、この世は不完全なものや苦痛に満ちているのである。ビューヒナーの神に対する懐疑は、『ダントンの死』におけるペインの科白にも明瞭に現われている。

「……神が世界を創造したことはありえない。世界あるいはわれわれの自我が少なくとも存在し、したがってまた世界が前述のように存在の根拠をそれ自体の中に、つまり神ではない何かの中に持っているに相違ないということははっきり分っているので、神は存在しえないのである。」
(S. 42 f.)

ビューヒナーは世界が神によって創造されたのではなく、世界はそれ自体の中に存在の根拠を持っているという立場から、スピノザ哲学に対して批判的にならざるを得ないのである。したがって「スピノザが神への道を見出ししているところに、ビューヒナーの場合、無神論の岩がそびえているのである。」¹⁶ 彼は1835年のグツコー宛の手紙で次のように報告している。

「ぼくは哲学研究をして全く馬鹿になりました。人間の精神のみじめさを新しい側面から再認識しました。やれやれ、どうにも仕様がありません

ん！もしわれわれのズボンの穴が宮廷の窓だと想像できさえすれば、王様のように暮せるのですが。しかし人々ははじめにふるえているのですからね……」(S.278)

結局、紆余曲折しながらも彼は哲学研究を断念せざるをえなかった。ビューヒナーは自然科学研究でみた調和のとれた世界と、現実(文学)の世界の深い断層を越えることはできなかった。彼が世界観を確立すべく哲学研究をすればするほど、さけ目は広がり矛盾は増大する。彼は『頭蓋神経について』の中で、次のように述べている。

「理性哲学者の教条主義とわれわれが直接知覚する自然の生活の間に橋を架けることが今までに成功したかどうかという問題は、否定的に批判しなければならない。先験哲学はなお荒れ果てた砂漠の中に入りこんでいる。その哲学自体と鮮やかな緑の生活との間には、大きな距離がある。それが将来進展するかどうか大いに疑問である。」(S.236)

このようにビューヒナーは、スピノザやカントをも含めた哲学と自然との大きな亀裂を明確に認識している。私はこの断層が彼の文学を生み出すエネルギーの根源であったと理解したい。彼は自然科学者に徹しようと思えばできた。が、内奥から湧きおこるやむにやまれぬ創作意欲に駆りたてられるように、彼は研ぎ澄まされた知性によって、現実社会の矛盾を作品の中へ形象化する。これこそ彼の人間として、またヒューマニストとしての人生の存在証明ではなかったか。

時すでに古典主義は終り、ビューヒナーの矛盾は時代の必然でもあった。ゲーテの場合、文学作品も「自然の掟」にもとづいて生み出され、文学と自然との間に矛盾はなく、両者は統一され調和に包まれていたといえる。が、「三月前期」は革命と反革命、新しい価値観と古いそれとの相剋に現われているように、政治的にも思想的にも混沌とした「過渡期」であり、作家は「世界観の危機」¹⁷に直面するのである。「われわれは危機的な過渡期の時代の他の作家にも、合理性と神話、科学と宗教の二重性を見い

出す」¹⁸ ことができよう。だが、とりわけビューヒナーの場合、彼の自然科学研究に裏打ちされた極めて現代的な視点から、現実の矛盾を抉り出しているがゆえに、よりリアリティを持った斬新な文学が成立したのである。ダントンに仮託して彼は「世界は混沌だ。虚無は生まれるべき世界の神なのだ」(S. 65) と述べるが、そこには彼が体験した人間社会の矛盾と苦悩がにじみ出ている。しかしビューヒナーは虚無の中に沈潜していたのではない。自然科学のプレパラートを透かして、彼は「生まれるべき世界」すなわち「新しい社会」(S. 282) を展望していたのである。

テキスト

Georg Büchner, Werke und Briefe, Carl Hanser Verlag, München, Wien 1980.
本文中の () 内の数字は引用したテキストの頁数を表わす。

注

- 1 Vgl. Rémy Charbon, *Die Naturwissenschaften im modernen deutschen Drama*, Zürich und München 1974.
- 2 Mario Carlo Abutille, *Angst und Zynismus bei Georg Büchner*, Bern 1969, S. 46.
- 3 Walter Jens, *Euripides Büchner*, Plullingen 1964, S. 48.
- 4 Ernst Johann, *Georg Büchner*, Hamburg 1958, S. 10f.
- 5 *Schulerinnerungen Friedr. Zimmermanns*, in : *Georg Büchner Werke und Briefe*, Frankfurt am Main 1972, S. 300.
- 6 Karl Viëtor, *Georg Büchner Politik • Dichtung • Wissenschaft*, Bern 1949, S. 215 ff.
- 7 Ibid., S. 217 f.
- 8 拙稿 *Zum Hessischen Landboten von Georg Büchner und Ludwig Weidig* 関西大学独逸文学会『独逸文学』23号参照。
- 9 この論文はフランス語で書かれ、シュトラースブルク図書館に保管されている。以下訳文については、手塚富雄他監修の『ゲオルク・ビューヒナー全集』河出書房新社、1970年に拠る。
- 10 同上 395ページ。
- 11 同上 439ページ。
- 12 同上 439ページ。

- 13 Gerhard P. Knapp, *Georg Büchner*, Stuttgart 1977, S. 37.
- 14 *Georg Büchner Sämtliche Werke und Briefe*, hrsg. von Werner R. Lehmann, Hamburg 1967, S. 236.
- 15 Ibid., S. 236 f.
- 16 Hans Mayer, *Georg Büchner und seine Zeit*, Berlin 1972, S. 362. なお、ビューヒナーとスピノザの関係については、この H. マイアーの論文ならびに、浅野利昭「ビューヒナーのスピノザ研究」日本独文学会「ドイツ文学」52号で有益な示唆をうけた。
- 17 Georg Lukács, *Der faschistisch verfälschte und der wirkliche Georg Büchner*. In: *Georg Büchner*, hrsg. von Wolfgang Martens, Darmstadt 1969, S. 212.
- 18 Ludwig Büttner, *Büchners Bild vom Menschen*, Nürnberg 1967, S. 85.

Zum Problem der Naturwissenschaft und Literatur bei Georg Büchner

— Konflikt mit der Harmonie und dem Chaos —

Takashi Hamamoto

Es ist schon bekannt, daß sich Autoren wie Goethe, Novalis, Chamisso, Büchner, Schnitzler, Döblin, Musil und Benn auch mit dem Gebiet der Naturwissenschaft beschäftigt hatten. Man kann zwar darauf hinweisen, daß ihre Beschäftigung auf ihre literarischen Werke einen sehr großen Einfluß hatte. Es ist aber nicht leicht zu erklären, welchen näheren konkreten Zusammenhang es zwischen den beiden Gebieten gab, weil dieses für sich schon komplexe Problem mit der innersten Weltanschauung des Dichters zusammenhängt.

Büchner ist heute viel berühmter durch sein dramatisches Werk als durch seine naturwissenschaftlichen Arbeiten; eigentlich war er vergleichender Anatom. Bis jetzt hielt man bei der Büchner-Forschung die Seite des Dichters oder des Politikers für wichtig und ließ allgemein mehr oder weniger die des Naturwissenschaftlers außer acht. In diesem kleinen Aufsatz möchten wir daher den Zusammenhang von Naturwissenschaft und Literatur bei Büchner problematisieren.

In welcher Weise hat Büchner als Wissenschaftler die Natur beobachtet? Er sagte in seiner Probevorlesung „Über Schädelnerven“ an der Universität Zürich: „... Alles, Form und Stoff, ist für sie an dies Gesetz gebunden. Alle Funktionen sind Wirkungen desselben; sie werden durch keine äußeren Zwecke bestimmt, und ihr sogenanntes zweckmäßiges Aufeinander-und Zusammenwirken ist nichts weiter, als die notwendige Harmonie in den Äußerungen eines und desselben Gesetzes, ...“ In der naturwissenschaftlichen Forschung erkannte Büchner das Naturgesetz, näm-

lich die Harmonie der Welt, in der die Naturdinge die Ordnung aufrechterhalten.

Man kann sofort bemerken, daß diese Anschauung über die Natur ganz anders als die über die Literatur ist. Seine literarische Welt handelt bekanntlich von Aristokratie und Revolution, Liebe und Haß, Armen und Reichen, Moral und Laster, Gott und Atheismus, Vernunft und Wahnsinn, Leben und Tod, mit einem Wort von Chaos. Büchner mußte also einen tiefen Riß, der durch den Konflikt zwischen der naturwissenschaftlichen Harmonie und dem literarisch behandelten Chaos hervorgerufen wurde, in der Weltanschauung erkennen. Er untersuchte deshalb die Philosophie von Spinoza und Descartes, um sich ein Weltbild zu machen, das den Konflikt auflöst. Aber die widersprüchliche Frage wurde hierdurch nicht gelöst und er hat diese Arbeiten abgebrochen: Er konnte nicht wie Goethe die Welt für das einheitliche und harmonische Ganze halten. Die Klassik war schon vorüber und Büchner mußte im Zwiespalt der Übergangszeit von Klassik zum Realismus leben, so daß seine „Weltanschauungskrise“ (Lukács) die notwendige Folge der Zeit war. Man kann aber vielleicht sagen, daß seine fruchtbare Literatur, die tief in die innere Seele des Menschen dringt, gerade im Sinnzusammenhang mit der dialektischen Denkweise durch diese „Weltanschauungskrise“ entstand.